

# その他

## 沖繩宮古島戦記

岐阜県 藤井正道

大東亜戦—太平洋戦争を通じ、最後の陸上決戦となつた沖繩本島での戦いについては、幾多の戦記、映画、テレビなどで、その全容は広く伝えられ、また語られて余すところがない。私は同軍団隷下で戦闘の焦点外に置かれた先島諸島のうちの宮古島決戦の一部に守備隊の一員として参加した。紙面の都合上、小生の手記より抜粋して簡略に記す。

昭和十九（一九四四）年初頭、米中部太平洋軍の侵攻速度が予想以上に速いことに驚いた大本営は、米軍

のその強大な機動力を駆使して、比島または小笠原諸島を跳び越えて一気に南西諸島に突進してくる公算も少なくないとして、急ぎ同方面の防衛強化を図る必要ありと判断し、昭和十九年三月二十二日大本営直轄の第三十二軍を編成した。

第三十二軍、軍司令官渡辺正夫中将、後任は牛島満中将、司令部は沖繩本島首里に置かれ、遅ればせながら南西諸島防衛はようやく緒についた。

同年五月二十日大本営が「捷号作戦」を決定、日本本土の防衛線を南西諸島及び台湾を結ぶ線に置き、同地区防衛のため、満州に駐屯の大兵力を転用するといふ非常措置策が発令され、次の編成が行なわれた。

第九師団・通称武部隊（金沢・沖繩本島―台湾）

第十二師団・通称剣部隊（久留米―台湾）

第二十四師団・通称山部隊（旭川―沖繩）

第七十一師団・通称命部隊（旭川―台湾）

第六十二師団・通称石部隊（京都―沖繩）

第二十八師団・通称豊部隊（東京―宮古島）

の六個師団と独立混成四十四・同四十五旅団が六月二十五日編成完了した。ただし豊五六二〇部隊のみ少し遅く七月十日出発、その他の部隊は鹿児島に集結、「富山丸」ほか数十隻に乗船、鹿児島港を出帆、南下したが、同二十九日徳之島東方沖において米軍潜水艦の攻撃を受けた「富山丸」が一瞬にして沈没し、乗船部隊およそ四千六百人中、約三千七百人が遭難死するという全滅に近い損害を被った。

生存者は奄美大島に一時収容された後、沖縄本島及び一部は宮古島に送られたが、指揮官クラスがほとんど死没し戦力がなく、八月一日急遽補充配兵の必要から全滿残留兵力の動員が下令された。

直ちに独立混成五十九旅団と同六十旅団（牡丹江）の二個旅団が同月十五日編成完了。第六十旅団は十八日任地宮古島に向けて牡丹江掖河の屯地を出発、翌十

九日鮮満国境関門を通過、二十一日釜山に到着、船舶の都合上郊外の小学校に暫時屯営（期間は十一日間）、九月二日釜山港にて「うる丸」に乗船出帆。鹿児島沖合にて両旅団が合流して船団として出帆、南下し、奄美大島にて機雷浮遊との情報に船団は迂回しながらジグザグ蛇行し、漸く同月十一日沖縄本島那覇港に寄港。同十三日宮古島平良港に着き、一夜を船上で明かし、翌十四日上陸（機材武器等も同じに陸揚げ）、旅団駐屯の東地区城辺村長岡に進出。我々黒木隊（黒木圭三大尉）は城辺村比嘉の天理教家屋を借用し本部を置き、その他は民家附近の空き地（畑野原）に幕舎を設置して、同日より先島集団司令部（第二十八師団）の指揮下に入り同地区防衛の任に服す。

同十八日より本格的陣地構築を開始すると共に守備防衛の任に就く。その当時の宮古島の所在部隊総兵力、陸軍二万六千人、海軍四千人、軍属八百人、合計三万八百人。

同二十一日予想外の台風（風速約五十m/s）に見舞われ全島攪乱し、各部隊とも幕舎の一部が壊され、

民家等に分散し宿営の余儀なきに至る。

十月十三日米軍艦載戦闘機多数来襲、海軍砲台砲、陸軍高射砲ほか各砲兵隊が猛烈な対空射撃にて応戦するも効果薄し。

着任以来統行中の水際防衛陣地構築作業を一時中止、航空機戦力が第一主義とされ、南西諸島を調査の結果、宮古島全体がわりと平坦で起伏に乏しく航空基地として最適であると判断した第三十二軍は、既設の海軍飛行場のはかに下地村東南部に二カ所、新しく陸軍中飛行場建設を短期間にて造れとの第三十二軍直命の発令に伴い、各部隊全員参加にて実施した。

滑走路の予定地に小高い丘があり、我が部隊はこれを取り除く爆破作業を連日実施、十月六日二カ所の滑走路完成。その間、九月十七日には第三十二軍司令官・牛島満中将一行の作業状況視察あり。

飛行場建設作業完了と同時に一時中止した陣地構築作業を引き続き再開復帰。

十月十六日、侍従武官・坪島文雄中将が状況視察にご来島により恩賜のたばこの下賜あり、一同久しぶり

に本格的なたばこに舌鼓をうつ。

十一月・十二月も水際防衛作戦陣地構築及び守備防衛に服す。

明けて昭和二十年正月の休みも束の間、九日米英軍艦載爆撃機（B 29 ミッチェル・B 29 ボーイング）が編隊にて来襲、二月十四日乙号戦備下令、戦闘配備に就く。三月二十五日米軍慶良間列島（渡嘉敷・座間味両島）に上陸、攻撃を開始、この時点において連続空爆の量度が激しくなった。

翌二十六日遂に天一号作戦令（一級戦）が下令され、一部戦闘配備を変更し、所定陣地を主抵抗陣地として守備防衛につき、この時点において最前線の各兵ともに十キロ梱包爆弾（背負式）が渡される（但し長男及び妻帯者は除かれた）。いよいよ肉弾戦かと悲壮な想いが連想された。

同三十日大空襲を受け、女学校・無線通信所・測候所等が大被害を被り、多数の戦死者及び一般民間人の人達にも犠牲者が出る。

四月一日米軍沖繩本島に本格的上陸攻撃を開始、と

の通信連絡があり。

この頃より宮古島に対しても米英軍の攻撃が一段と敵しさが加わり連日間断無く続く。

五月五日米軍艦隊十五艦、宮国―新里―砂川沖に来襲、艦砲射撃の一斉攻撃を受け、空爆も二百五十キロ―五百キロ爆弾を雨アラレのごとく降らせてくる。主として飛行場及び掩体機に向けられたが、一部民間部落建物にも向けられるようになり被害も著しく、空襲に明け暮れの日が続いた。

四・五・六月中に来襲せし米英軍機数左記のとおり  
四月中来襲米英軍機数

三日―一二〇機、五日―二〇〇機、七日―五九機、

八日―一二〇機、九日―七七機、十日―一九機、

十三日―二三機、二十日―五八機

五月中来襲米英軍機数

一日―八三機、三日―七〇機、八日―六七機、

十一日―五四機、十三日―五八機、十五日―九三

機、

十八日―八五機、二十日―四五機、

二十四日―三二機、二十五日―七〇機

六月中来襲米英軍機数

一日―十日―八三三機、十一日―十四日―三七〇機、

十五日―六〇機十八日、八四機、十九日―六六機、

二十日―六〇機、二十一日―一〇〇機、

二十五日―五八機、二十六日―六〇機、

二十七日―四四機、二十八日―一〇機、

二十九日―四三機、三十日―三九機

六月二十一日沖繩本島の第三十二軍司令部との通信連絡が遮絶状態となり、本島戦の終末近きを思わせた。

同二十三日沖繩本島部隊が遂に玉碎、翌二十四日第三十二軍司令官牛島満中将・参謀長長勇中将が午前四時三十分海岸に面した坑道陣地内において日本古式武士道の礼式にて自刃。(四月一日より八十三日間の死闘)

牛島満中将 辞世の句(二句)

矢弾やだま尽き天地あめちち染めて散るとても

魂還り魂還りつつ 皇国みくに護らむ

秋を待たで枯れゆく島の青草は

皇国の春によみかへらなむ

七月に入つて以降、米軍の攻撃の重点が日本本土に向けられたのか宮古島が取り残されたように間断無く続いてきた空爆も小規模かつ五月雨式となった。

八月十八日部隊本部にて三日遅れで終戦の詔勅を拝し、何とも勿体なさに目頭の熱くなるを覚え、一同沈痛な面持ちであった。

同二十五日陸・海・空軍部隊に対して漸く戦闘行為停止命令が先島集団長納見敏郎中将より発令された。

九月十五日米軍宮古島に上陸、同日城辺村の黒木隊本部附近において捕虜検閲を受け、同時に武装解除、武器弾薬等を処分し、丸腰となる。

十二月十三日先島集団長納見敏郎中将自決。停戦時における宮古島全地区の兵員数及び戦没者は左記の通り

兵員数（空軍は随時移動のため不明）

陸軍将校 一〇八六八

准士官下士官 四五二三人

兵 一万八二一八八

軍 属 七六四八

海 軍 二五〇〇八

合 計 二万七〇九一人

戦没者（空軍と民間関係者は不明）

陸軍関係 三六二八八

海軍関係 三五三人

合 計 三九八一人

想い出せば、わが黒木隊は南西諸島の防衛強化のため、出動下令により、はるばる全滿各地より集結南下し、国土最前線の宮古島守備防衛の任務について以来約一カ月半の間、あらゆる悪条件の困難を克服しつつ、その危機を乗り越えてきた貴重な体験を得た。

人生の歩みを振り返って見ると、若き頃の軍隊という異色の生活の中から強制的にあるいは自然にいつの間にか不屈の精神が養われ、身についたことが、今にして思えば、これが影の力として大きく自分を支えてくれたといえるだろう。

戦争の犠牲となられた軍関係者及び民間の方々の尊い戦没者のご冥福をお祈りして擲筆いたします。

### 【解 説】

大本営は三月十四日に米機動部隊がウルシーを出撃したという情報に関連して、敵の次期来攻方面は南西諸島の公算が大であると判断していた。さらに三月二十日になると、陸海軍統帥部は敵の次期来攻を、四月初頭に南西諸島方面、使用兵力は最大六個師団と、南西諸島へ来攻を第一にあげた。

連合艦隊の判断はさらに決定的で、敵空母群は二十四～二十六日ごろ沖縄に再来襲、二十七～二十九日艦砲射撃を加えると共に、再度九州方面に対し阻止作戦をし、三月末日または四月一日に南西諸島上陸を決行するだろうと判断していた。

米国の沖縄攻略は決定していて、三月十日までに、沖縄に一個またはそれ以上の拠点を占領するように命じていたという。ニミッツ大將は、当初三月一日に沖縄を占領する企図を命令していたが、諸情勢により延

期、沖縄は四月一日ごろ攻略と提案されたという。理由は船舶関係と天候不良によるものであった。

三月二十三日から、南西諸島に対し米艦上機の大空襲が開始された。藤井氏の体験記にもあるごとく、南西諸島（宮古島等）でも、天一号作戦令が下令され、所定陣地を主抵抗陣地として守備防衛に就いたと記されている。

三十日には大空襲による大被害を受け、一般民間人（非戦闘員）にも犠牲者が出たという。そして、民間の部落の被害も大であり、毎日のように空襲があったという。

その後、沖縄本島に米軍が上陸し、沖縄本島は玉砕した。連合軍は当初台湾を狙うだろうと予想し、沖縄の第九師団（金沢師管区）の北陸精鋭を台湾に移し、台湾防衛に重点を置いた。しかし、沖縄本島が玉砕すると、宮古、石垣島の南西諸島は置き去りにして、本土（九州）上陸を企図していた。従って、宮古島は小規模の空襲によって封じ込められたのである。

昭和二十年六月二十三日、沖縄本島ほかは玉砕が発

表され、周辺の南西諸島は孤立、取り残されたまま終戦を迎えたのである。

本島以外の地区とは、宮古島地区、石垣島地区、徳之島地区、大東島地区である。